

## 報告

# 野外活動キャンプ実習実施報告

岩田和鷹<sup>1</sup>

## I. はじめに

岡山理科大学では講義や研究において砂漠や島、街中などのフィールドワークが多く行われており、学生を対象とした事前講習が必要となっている。

今回の実習は2018年5月25日から27日の三日間にかけて実施した。対象はこれからフィールドワークを始める学生とし、道具の準備から片付けまでの全てを実施してもらった。そして、フィールドでの過ごし方を体験すること、フィールドに潜む危険、魅力について学ぶことを目的とした。

## II. 実習場所

岡山理科大学C2号館4階実習室で屋内実習をし、自然フィールドワークセンターの自然植物園にて野外実習をした。自然植物園へは半田山、岡山理科大学笹ヶ瀬キャンパス経由のルートを徒歩で移動した(図1)。

## III. 実習

一日目は講師と参加者の顔合わせ、自己紹介をした。その後実習の流れ、実習場所の確認、準備物



図1. 自然植物園へのルート。黒三角：岡山理科大学，赤丸：歩いたルート，黒四角：自然植物園。

<sup>1</sup>. 〒793-0214 愛媛県西条市中奥1-25-1 NPO法人西条自然学校 NPO Saijo Nature School, 1-25-1 Nakaoku, Saijo-shi, Ehime-ken 793-0214, Japan.



図2. 道具のバックング.

表1. 道具一覧.

＜個人装備＞	＜共同装備＞
食器類	テント
マット	食料
シュラフ	しゃもじ・おたまセット
ヘッドライト	鍋(小、中)
雨具	ガスバーナー
タオル	チャッカマン
水	燃料
ゴミ袋	保冷剤
	トイレットペーパー
	救急箱
	コンパス
	地図



図3. ルート確認.



図4. コケ観察.

の説明をした。以下、二日間の実習の流れを示す。

### 1. 準備・移動

実習当日は最高気温25℃を越す夏日であったため、加熱済みの加工肉と野菜、飲料水を購入した。岡山理科大学C2号館4階実習室にて食材をカットし、メニューごとに分けた。その後、野営で利用する道具(表1)のバックングをした(図2)。バックングの際はあまり使わないものをザックの下側に、頻繁に使うものはポケットなど容易に出せる場所に収納する必要がある。

準備が終わり、野営地である自然植物園へ徒歩で移動する。笹ヶ瀬キャンパスにて地図とコンパスを使い、現在位置と自然植物園へのルート確認をした(図3)。

### 2. 野営

野営地の周辺にはヤマウルシやヘビ類など注意が必要なものもある。それらの危険について事前に説明した後、双眼鏡やルーペを使い、鳥やコケ、昆虫などの観察をした(図4)。夕食後には星座表を用

いて星空を観察する学生や、希望者へロープワークの指導を行った。

#### (1) テント設営

テントはsnow peak社製のアメニティドーム6人用を使用した。設営場所は風や雨による水たまりなどを考慮する必要がある。場所を決めたのち、テントを組み立て、ペグとガイドロープを用いて固定する。風が弱い際、ガイドロープはなくてよい。今回は練習のためロープとテントの結び方を指導した。

テントの種類によって組み立て方や性能は全く異なる。そのため、今回は一人用山岳テントの設営も練習した(図5)。

#### (2) 調理

調理にはガスバーナーを用いた。着火時にはやけど防止のため上からの覗き込みは厳禁である。風が強い際は沸くまでにかなりの時間がかかるため、バーナーをアルミ板で囲むなどの対策が必要である(図6)。使用した食器はトイレットペーパーでふき、大学に戻ってから洗った。





図 5. テント設営.



図 6. 調理.



図 7. 危険を知るワークショップ.

### 3. ワークショップ - フィールドの魅力と危険を知る -

実習を振り返り、フィールドの魅力、危険を知るためのワークショップをした(図 7)。

#### (1) 魅力

一日目の打ち合わせから準備、今日までの実習を振り返り、それぞれが実施したことや感じたことをポストイットに書き出し、意見交換を行った。学生からは食材の買い出しや道具の準備、野営地での生きもの観察、テントの設営、野外での調理を通して、パッキングの方法、双眼鏡などの道具の使い方、ダンゴムシなどの生きものやテントの構造、ロープワークなど、普段の生活では見ない、やらないことを体験し学ぶことができたようだ。意見を出す際にはポストイットに絵を描く学生や単語だけ書いて説明する学生などそれぞれの個性あふれる意見交換を見ることができた。

人が物事を見る視点はそれぞれ異なり、魅力とを感じるものも多様である。他者の意見を聞くことで自身では感じることはできない部分に気づくことが

表 2. 実習内で検討した危険.

	顕在的	潜在的
人的要因	ガスバーナーの扱い テント設営時のハンマーの扱い テント設営時にポールが人に当たる 双眼鏡で太陽を見る 自動車などの確認 有刺鉄線に触る 地図の不足 虫よけの扱い	声かけをせず集団から離れる 水の不足 テントのガイロープで夜つまづく ロープワークの技術不足
環境要因	マムシ、ヘビ、イノシシ、ダニ、ケムシ 栗のトゲ、ウルシ 木の根やぬかるみによる転倒	昼夜の寒暖差 熱中症

できる。

#### (2) 危険

フィールドには常に危険が潜んでいる。実習の中で危険と感じたものをポストイットに書き出し、危険の原因と要因について整理した(表 2)。整理することで危険への対策や回避がしやすくなる。

危険の原因には顕在危険と潜在危険がある。顕在危険は火や崖など視覚的・体感的に事故やケガに結び付きやすいと判断できるものである。潜在危険は道具の整備不良や体調不良など直接目に見えないものである(自然体験活動研究会 2011)。

危険の要因は環境要因と人的要因がある。環境要因は落雷などの自然環境による危険やハチなどの生物学的危険である。人的要因は危険に対する知識を知らない、技術不足によりできない、知識や技術があるにも関わらずやらないことである(自然体験活動研究会 2011)。

今回の実習は大学から自然植物園へ移動して野営する。そのため、移動時には交通や転倒、道迷い、全体を通しては生き物によるケガ、道具を扱う際の

事故などが考えられる。また当日は気温が高くなったため、熱中症も考えられた。学生からはマムシなどの生き物や移動時の転倒、熱中症による危険が多く挙げられた。

#### 4. 片付け, 移動

野営で使用したテントを片付ける。この際に夜露や結露によって濡れている場合はタオルでふき取り、乾燥させてから片付ける。テントやシュラフなどは綺麗に畳まなければ収納ができないため少し手間取る学生もいたようだ。その後、岡山理科大学へ戻り、使用した道具の片づけをした。

#### IV. まとめ

今回の実習を通して、道具の準備からフィールドでの調理、テント泊の体験とフィールドの見方を伝えた。熱中症の危険があったため事前に飲料水の量や帽子の着用について説明したが、準備が不足している学生が数人いた。また、学生の一人が集団から離れて行動する際にだれにも連絡しておらず、行方がわからなくなる場面があった。今回は少し集合時

間に遅れただけで何も起こらなかったが、携帯電波の届かない山奥などフィールドが変わると遭難に繋がる可能性がある。

このように危険に対する認識がまだ甘く、大丈夫だろうと思って行動しているように感じた。フィールドによって必要な準備物や潜んでいる危険、危険の程度は変化する。事前に危険を予測、対策して安全なフィールドワークを心掛けてほしい。そして、様々な視点からフィールドを見ることができるよう感性を磨いてほしい。

#### V. 謝辞

実習開催にあたりサポートしていただいた自然フィールドワークセンターの皆様、大迫亮典氏に感謝します。

#### VI. 引用文献

自然体験活動研究会(2011). 野外教育入門シリーズ 第2巻野外教育における安全管理と安全学習-つくる安全, まなぶ安全-. 166pp. 杏林書院, 東京.

(2019年1月7日受理)